



たの」ということになる点も気にならないわけではない。

#### ◆新たな解釈からの揺さぶりも

そこで、あまり一般的でないながら考えてみたい解釈が、同じ人の会話が続くという解釈である(2)。同一人物による会話の連続というの一般的な書き方ではない。しかし、同一人物でも、時間をおいて発話する場合、カギ括弧で並置することはあり得ないわけではない。

これは、弟が「クラムボン」を見ながら半ば独り言的に話していて、兄が「それなら、

1  
兄「クラムボンは笑ったよ。」  
弟「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」  
兄「クラムボンははねて笑ったよ。」  
弟「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」  
兄「クラムボンは笑っていたよ。」  
弟「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」  
兄「それなら、なぜクラムボンは笑ったの。」  
弟「知らない。」

なぜクラムボンは笑ったの。」ときいてくる、という解釈である。

こう考えると、表現として、弟が、「クラムボン」を描写して連続して発話していることになるので、「よ」の使用、「は」の使用にも説明がつく。それぞれの発話の間に「間」があり、そこに時間の流れがあるという解釈もできる。さらに、「なぜ笑ったのか」という兄のツツコミとの関係も一応は整合的になる。弟蟹と兄蟹の会話は、二人の言い合いとして読むのが一般的ではあろう。しかしまた、ここで述べたように、弟蟹が独り言のように「クラムボン」をじっと見ながら何度もつぶ

2  
弟「クラムボンは笑ったよ。」  
弟「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」  
弟「クラムボンははねて笑ったよ。」  
弟「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」  
弟「クラムボンは笑っていたよ。」  
弟「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」  
兄「それなら、なぜクラムボンは笑ったの。」  
弟「知らない。」

さん蟹は出てこない)。突然訪れるささやかな喜び、そして、この世界の美しさ。——そうした作品全体の構造と表現との対応関係も含めて、一つ一つの場面と会話を改めて捉えなおしてみることもあってよい。

### 3 すがたを変える大豆(三年)

#### ◆段落内部の構造を捉える

「すがたを変える大豆」は事物解説型の説明文である。身近なところから導入する「初め」、加工の度合いに対応した説明の順序性が指摘できる「中」、そして、「このように」などでまとめる「終わり」、といった段落相互の関係は重要である。

しかし、読みを深めていくときにもう一つ注意したいのが、段落相互の関係だけでなく、段落内部の書き方である。例えば、「さらに、目に見えない小さな生物の力をかりて、ちがう食品にするくふうもあります。ナットウキンの力をかりたのが、なっとうです。」のように、要約的な内容を最初に示す構造となっている。これは、その段落の方向性を理解しやすくする書き方の工夫といえる。文章の構造は段落どうしの関係だけではなく、段落内部での文の関係からも考える必要がある。こ

うした点は、書く活動でも活用することができる。

これと対応して、文型の選び方にも注意したい。例えば、「なっとうはナットウキンの力をかりてつくります」などと書くのではなく、「～のが……です」のような文型を使うことで、わかりやすく、また多少強調して説明することができている。段落の位置づけとともに、そこに出てくる文型とはどういったものか、を考えてみることも、書き方の工夫の分析につながる。

#### ◆読み手の知識への配慮に着目する

一般に事物解説型の説明文では、読み手の知識に対して一定の配慮がなされている。例えばいきなり「ダイズ」というのと、「ダイズという植物」のような表現をするのとは、その配慮に違いがある。読み手が自分の知識の中で位置づけて読めるような配慮となっているのである。

解説の中でも、「目に見えない小さな生物の力」、「ナットウキンの力」というように一般的な説明と固有名とが言い換えられ、概念が把握しやすくなっている。問いと答えのような表現も含めて、読み手の知識への配慮は重要な要素である。

やくという読み方を検討してみるのも読みへの一つの揺さぶりになる。時の流れや「間」も読み取れる。また、日常の会話と比べることは、自分たちの会話のしかたへの省察にもなる。

#### ◆作品の構造と表現の関係を捉える

全体的な構造も重要である。この物語では、いろいろなものが身近なところへやってくる。前半部には、魚やかわけみもやってくるが、そこに「死」もある。しかし、後半部には「やまなし」のようないいものもやってくる。季節の違い、昼夜の時間の違い、視覚と聴覚といった感覚の違い、オノマトペの工夫などの読み取りももちろん重要である。また、その一方で、「兄弟蟹の場面」何かが来る(そして何が起こる)場面↓お父さん蟹が解説してくれる場面」という構造の共通性があることにも注意しておきたい。

全体を通じて、谷川の流れは時間の流れと連動している。生きるものの間近にある「死」。生きることの弱さ、そんな中で成長する兄弟蟹とお父さん蟹という家族の姿(お母

#### ◆言葉の意味構造を分析する

この説明文では、「工夫」という語が重要なキーワードとなっている。では、そもそも「工夫」とはどんな概念なのであろうか。考えられるのが「課題(おいしく食べる)」を、ある「方法・発想(にる・いるなど)」で「解決する(食品にする)」という意味構造である。言葉の意味の構造を考えることも、事例を整理して読むことに役立つように思われる。

#### おわりに

以上、構造ということに焦点を当てつつ、「言葉に着目した読み」について考えてみた。読みの力をつけるには、子どもの主体性に配慮しつつも、適切な教師の働きかけや方向づけが必要である。的確で豊かな読みの育成のためには、言葉を大切にされた教材研究も重要だと言える。



1960年、京都府生まれ。早稲田大学文学学術院教授(日本語学)。言葉と教育の接点を研究中。光村図書小学校『国語』教科書編集委員。著書に、『コンパクトに書く国語科授業モデル』(編著/明治図書)『日本語・国語の話題ネタ』(ひつじ書房)、『日本語の<書き>方』(岩波書店)など。